男子は更衣室を使えずプールサイドですっぽんぽんに着替える水泳部。しかし途中から女子も更衣室を使えなくなり・・・

私が中学時代に入っていた水泳部は、今思い返してもかなり特殊な環境だった。

当時の部は、男女合わせて30人弱。練習は平日放課後と土曜日の午前中がメインだった。顧問の先生は40代後半の男性で、元水泳

選手らしく体格が良く、声が大きくて威圧感があった。

女子更衣室は学校の体育館脇にあった。古くて狭い部屋で、ロッカーは半分以上壊れていて、湿った匂いがいつも漂っていた。女子は当然そこを使って着替え、水着に着替えてからプールサイドに出てくる。一方、男子は更衣室を使えず、プールサイドの端っこ、観客席の下のコンクリートの壁際で着替えるのが決まりだった。しかも先生の厳命で「タオルで隠すのは時間がかかりもったいない」という理由から、男子は全員、タオルを使わずに全裸になり着替えていた。

つまり、プールサイドの端で、男子たちは堂々とちんちんを丸出しにして、競泳パンツに履き替える。

男子たちは最初のうちは本当に辛そうだった。1年生の頃は特に、顔を真っ赤にしてうつむき、肩をすぼめて体を縮こまらせながらパンツを脱ぐ子が多かった。縮こまったちんちんの包茎の皮がぴったりと閉じて、先端が完全に隠れている姿が、なんだか無防備で哀れに見えた。

でも、先生に何度も「堂々としろ」「男なら恥ずかしがるな」と叱られるうちに、男子たちは徐々に諦めの境地に入っていった。2年生にな

る頃には、パンツを下ろす動作に慣れが見えてきた。心の中では「女子に見られる……」「早く終わらせたい」と思っているのが、表情から伝わってきた。

一方、女子たちはわざと早く着替えを済ませ、プールサイドに出てくる子が多かった。スクール水着に着替えた女子たちが、遠巻きに、あるいはわざと近くを通りながら、男子の着替えを眺める。最初は「かわいい」「まだ子供っぽい」とひそひそ笑っていたのが、だんだん「見てて面白い」「反応がかわいい」「包茎が多いね」と、言葉が露骨になっていった。私もその輪の

中にいて、男子がパンツを下ろす瞬間をじっと見つめていた。ちんちんがぴょこんと飛び出して、外の空気に触れてピクッと縮む様子が、なんだか無力で愛おしくさえ感じた。男子が視線に気づいて顔を赤らめ、目を逸らそうとするけど、先生に睨まれて無理やり正面を向かされる。その瞬間、女子の間で小さな笑い声が漏れる。「顔赤い」「恥ずかしがってる」「かわいー」そんな言葉が飛び交うたびに、私たちは自分たちが「見る側」であることに、強い優越感を覚えていた。自分たちは水着で隠れているのに、男子はすべてを晒さなければならない。とても気持ちよかった。